

アスペクトの諸層と事態の構造

長澤陽子 佐野 洋

(財) 新世代コンピュータ技術開発機構

概要

いわゆるアスペクト文法と呼ばれる一群の文法カテゴリーは、述語の意味とその接続時の共起形態の双方の視点から「時点局面」「遂行局面」「事態局面」の3種類に大別できる。これらの局面は、動的概念や事態の構造を規定し、その意味構造を固定する際に極めて有用である。本稿では、この3区分をもとにアスペクト文法に与える区分を階層化した。本稿で提示する類型化の特徴は、主体の事態遂行のための意志という観点からアスペクトという範疇を区分したことにある。さらに、これを基礎として日本語述語文の表層形態と、その示す動的概念及び事態の構造との対応づけを行う。

1 アスペクト文法の3区分

1.1 時点局面

述部の示す動的过程の一時点を抽出する役割を果たすのが時点局面である。3種類を設ける。以下の表層に対応する。本稿の分析では表層形態に空連糸を仮定する。「 $\emptyset$ 」は空連糸を示す。

始動	「始める」「だす」
終結	「終わる」「終える」「おやす」 「やむ」「やめる」「きる」 「はてる」「はたす」「あげる」
完了	「 $\emptyset$ 」

1.2 遂行局面

ある時点における主体の立場を示すアスペクト表現である。時点局面の後に必ず伴い、その時点における主体の立場を示す。9種類を設けており、以下の表層に対応する。

未然	「かける」「かかる」
継続	「つづける」「つづく」
完成	「とおす」「てしまう(対抗の完全動態)」
逸走	「てしまう(逸走の完全動態)」
経過	「てくる」
維持	「ていく」
設置	「ておく」
試行	「てみる」
遂行	「 $\emptyset$ 」

1.3 事態局面

表現された事態が状態の型をもつか、あるいは出来事の型であるかを示す。さらに、状態の型の場合は、その状態の概念(後述)に対する位置関係を示す。5種類を仮定し、以下の表層に対応する。

Aspects in Predicate Structure
NAGASAWA, Youko SANO, Hiroshi
ICOT

単純状態	「ている」
結果状態	「ている」「である」「であるところだ」 「たてだ」「たところだ」
進行状態	「ている」「つつある」「ているところだ」 「つつあるところだ」「ていたところだ」
未然状態	「そうだ」「るところだ」
非状態	「 $\emptyset$ 」

1.4 共起形態

これらの局面に対する表層相互の共起関係の調査により、以下が明らかになった。

1. 事態局面に他の局面は接続しない
2. 時点局面に時点局面は接続するが後接する局面は始動相に限定される
3. 遂行局面に時点局面は接続するが、後接する局面は始動相に限定される
4. 時点局面に遂行局面は接続する
5. 遂行局面に遂行局面は接続する
6. 「つづく」「つづける」「とおす」といった複合動詞後要素の一部は用言語基に直接に接続する
7. 「おやす」「やめる」「やむ」「きる」といった、ある現象を反復まで含めた広い視点で捕らえることの多い語の場合、後接する文法に制限がある

これらから、事態局面が構造的にみて最も外部に存在すること、時点局面と遂行局面はこの順序で繰り返し接続できることがわかる。もちろん時点局面＝完了かつ遂行局面＝遂行の場合は表層が空連糸であり、表層的には時点局面と時点局面の接続あるいは遂行局面と遂行局面の接続の形をとる。

従って、アスペクト文法の共起関係は次のごとくなる。

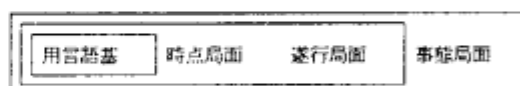


図 1:

ここで、時点局面と遂行局面の連鎖は繰り返しが可能である。ただし、上述の6と7で指摘したように前後の要素に語彙上の制限をもつ類が存在する。語彙レベルの特異性については、本稿の議論の範囲に入らない。

2 アスペクト文末とアスペクチュアリティ

2.1 アスペクチュアリティ

前面で述べた共起関係は、概念及び事態の構造を反映している。

一般に、概念には用言語基によって表される動的概念と、情態語基や体言語基によって表される静的概念とがある。動的概念について言えば、これにさらに時点局面を表す文末と遂行局面を表す文末とが接続することによって別の動的概念をつくることができる。事態の持つアスペクティックな意味について、本稿で提案するアスペクト区分と階層分析の適合性について概説する。

図1において、用言語基の段階ではその示される事態は点ではなく過程である。これに時点局面を示すアスペクト文末が階層的に隣接することによって、用言全体により示される動作過程の開始や終結点の抽出、その過程の経路による完了点の抽出が行われる。

- (1) 「食べ終わる」 終結点の抽出
「食べる」 完了点の抽出

点として表された「時点概念」には、遂行局面を示すアスペクト文末が接続し、主体とその「時点概念」との間の関係を表現することができる。こうして、時点概念をもとに「遂行概念」が生成される。

- (2) 「食べ終わってしまう」
(3) 「食べてしまう」

(2)と(3)では新しい動的概念が誕生するが、この概念もプロセスを有するため、必然的に開始点・終了点・完了点を設定できる。

- (4) 「食べ終わってしまいはじめる」
「食べてしまいはじめる」

理論上はこの繰り返しによって同一の語基をもとに無限の動的概念が存在することになる。

ただし、構造の比較的内部において、時点局面＝終了もしくは開始が使われた場合、通常2から3回の反復にとどまる。時点局面＝完了に遂行局面が接続していく場合、4回の繰り返しがおこることもあるが、動的過程の引き延ばしにくい遂行局面が用言語基に接続した場合は、その後の繰り返しの回数は減少する。この繰り返しについての制限は、現在、語彙の性質をもとに分析中である。

2.2 事態の区分とアスペクト類型

日本語述語文における事態は、概念を示す表現に事態局面を表すアスペクト文末が接続することにより、その類型が判明する。

事態は意味の点から「状態型」と「出来事型」に分類できる。上述の事態局面のうち、動的概念に非状態型を示す表現である空連系が接続したものが出来事型であり、動的概念にそれ以外の事態局面が接続したものが状態型である。例えば、動的概念はアスペクト文末である「イル」系の形態の接続によって状態型になる。同一の表層が異なる事態局面に対応している(「ている」「てしまう」などの)場合、どの事態局面になるかは「イル」系の形態特徴だけではなく動的概念の素性によっても決定できる。我々は、動的概念を区分仕分ける素性として、現在5種類を仮定している。「過程形態」「変化形態」「変化結果」「空間性」「主体意識」である。それぞれは特定の値を持つ。紙面の都合上、詳細な説明は省略するが、これらの素性と事態局面のアスペクトとの相関による状態型の違いを例を示す。

事態の型	詳細区分と素性(動的概念)	表層形態
出来事型	非状態(-)	○
状態型	単純状態(過程形態/n, 持続形態/s1)	「イル」
	結果状態(変化形態/sp)	「イル」
	進行状態(過程形態/b-e)	「イル」
	未熟状態(-)	「イル」
		/“ルトコダ”

以下の例では、いずれも事態局面のアスペクト文末の連接により、事態は状態の類型を持つが、「食べる」「食べ始める」各々の動的概念の異なる素性の違いから事態局面の種類は異なる。

- (5) 「食べている」 進行状態[食べる[過程形態/全体]]
「食べ始めている」 結果状態[食べ始める[過程形態/始動]]

3 まとめ

いわゆるアスペクト文末は、一般に語彙に特定される意味において個別に議論されることが多い。下位区分の試みとして、寺村[3]は、接続形態の種類から、ル・タの対立形態を一次アスペクトとし、以下、テフォームを二次アスペクト、それ以外を三次アスペクトとして区分した。本稿では、従来、多くの場合に、アスペクト群として一列に論じられてきたアスペクト文末を形態上の接続関係ではなく構造化によって分類した。さらに、述部の構成に階層を過程し、事態を物理的に捉える時相の局面と主体が認知的に捉える遂行の局面を仮定するとともに、その間には連接の順序関係があることを指摘した。いわゆるテ形はアスペクトに関する構造を閉じる働きがあるものとして、空連系とテ形の対立により非状態と状態の区分を行った。これらの考察から、事態のもつアスペクチュアルな面は大きく3つの段階があると言える。それぞれには、アスペクトの値を示す形態が空連系を含めて存在し、ある程度、事態の類型化の手段となり得る。

現在、機械上で動作する文法に、この結果を応用してアスペクトの分析実験を行っている。文法はDCG[6]記述に従い、ICOTにて開発された自然言語処理支援環境 LINGUIST[2]上で、事態特定の実験を行っている。今後、さらに共起関係についての細かい規則を加え、アスペクチュアルな意味の抽出だけでなく非文チェックなどにも応用したい。

参考文献

- [1] 金田一春彦、「日本語動詞のアスペクト」むぎ書房、1976.
- [2] 佐野 洋、田中裕一、佐々木博司、小野浩治、木下聡、論理型文法の枠組における言語分析支援環境、情報処理学会研究報告、90-NL-77、1990.
- [3] 寺村秀夫、「日本語のシンタクスと意味」くろしお出版、1984.
- [4] 森山卓郎、「日本語動詞述語文の研究」明治書院、1988.
- [5] 渡辺実綱、「副用語の研究」明治書院、1983.
- [6] Fernando C.N. Pereira, David H.D. Warren, *Definite Clause Grammars for Language Analysis - A survey of Formalism and a Comparison with Augmented Transition Networks*, Artificial Intelligence 13, 231-278, 1980